慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済学の心理的、個人主義的基礎 : リーフマンの経済学方法論
Sub Title	
Author	気賀, 健三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1932
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.26, No.10 (1932. 10) ,p.2159(653)- 2183(678)
JaLC DOI	10.14991/001.19321001-0653
Abstract	
Notes	慶應義塾創立七十五年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19321001-0653

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

經濟學の心理的、個人主義的基礎

——リーフマンの經濟學方法論——

氣賀健三

一　序論
二　「經濟」の心理的解釋
三　心理的解釋と價値論排斥
四　「經濟」の個人主義的基礎

一　序論

今日の經濟學の內容を爲せる諸種の問題は其起源を尋ねれば古く、人間の社會生活の最初の時代に溯ることが出來るし、又一定の體系的學說としての經濟學の歷史を顧れば、其誕生は十八世紀の中葉に起つた佛國の重農學派又は英國の古典學派にまで溯及することが出來るのであるが、然かも今日尙ほ理論經濟學に確固たる定說の見出さるゝに至らぬ次第は、世間一般から普く認められたる事實である。

嘗ては古典學派が其當時の文明諸國を風靡した觀があつたが、其後暫くにして獨逸に起つた歷史學派の反抗に遭遇するや忽ち其牙城の一角を切崩され、古典學派は歷史學派の隆盛の爲に暫時沈默の形であつた。而して十九世紀

の後半に於て古典學派の理論的主張は、舊き衣を脱ぎすて限界效用學說なる新しい武器を携へて華々しく學界に登場し、忽ちの中に全世界を席捲せるが如き有樣であつた。然れども其學說が一度び全世界に行亘つてしまふと、今度は舊來の諸學派がそれ〴〵の立場から、之に非難を加へ或は之を批判し或は之を訂正して、其間完全なる一致を見ることは殆ど全く不可能な有樣である。今日、二十世紀の前半に於ては、當初主張されたる其儘の限界效用學派の立場を主張する學者を發見することは容易なことではあるまい。斯る狀態は科學が日に月に進步することを表はすものであるとすれば、大に慶すべきであるが、それは又他の一面に於て何人をも心服せしむるに足る可き學理が未だ何人に依つても說かるゝに至つて居らぬといふことを意味するものと考へねばならぬ。

本論文に於て研究せんとするリーフマンの理論は實に斯る狀態に對する不滿から生れたものである。リーフマンは自ら大言壯語して曰く、「余は、從來の理論の不完全なる狀態に就き、實に二十餘年の久しきに亘つて苦心を重ねた。最初の中は、單に個々の部分に改良を加へる必要がある丈けと信じて居つたのであるが、……後に至つて、余は漸く最も一般的なる基礎、即ち經濟的なるものゝ解釋が全く誤つて居ることを認めるに至つたのである。其處であらゆる交換經濟的現象一切を新しい基礎の上に立てゝ說明し、經濟理論の統一的體系に到達せんとするといふ任務と目的が與へられたのである。」（註一）と。更に又曰く「余が嘗て "Ertrag und Einkommen" (S. 69) に於て『余の理論の上に立てば、資本利子、地代及び企業家利潤に關する複雜な理論は自ら崩潰し……之と同時に部厚な幾多の著書は共意義を失ふ』と主張した時に、世間の人々は之を甚しい自惚れと考へたかも知れぬ。が併し、余をして言はしむれば、余の主張は啻に正しい許りでなく、余が共當時自ら信じて居つたよりも、今日に於て尙一層廣く一般的に當嵌るものである。嘗ては當時の最大の眞理の一つとして通用して居つた所のケネーの經濟表を吾々が今日觀察すると同樣に……魔てベーム・バヴェルク、クラーク、シュンペーター、ウィーザー等の著書を、否な從來の全所得論、並に現今の經濟理論の基礎全體をば一種の好奇心を以て回顧する樣な時代が來ることは確である」（註二）と。

註一　Robert Liefmann; Grundsätze der Volkswirtschaftslehre Bd. I. 3. Aufl, 1923. S. 220.

註二　a. a. O. S. 223.

學說史を振返つて見れば、長年月に亘れる論爭の間に二種の根本的對立があることを見ることが出來ると考へる。其中の一つは價値論上に於ける主觀主義と客觀主義の對立であり、又他の一つは方法論上に於ける所謂る社會的觀察法と個人主義的觀察法の對立、換言すれば社會的原則と個人的原則との對立である。此區分は素より勿論相對抗する二つの潮流を見方に依つて名稱を變えたのではない。前者の對立と後者の對立との間に必然的な論理的關聯がある譯ではない。けれども、大體に於て價値論上に於て主觀主義を採るものは方法論に於て、個人主義的出發點を取り、之と反對に客觀主義の價値論を採用するものは社會的觀察法を採用して居る。限界效用學派は前者の立場を代表する最も有力なる學派であり、社會主義の經濟學說や社會的法的學派の學說は前者に反對して後者を採れる極端なる一派である。此對立は大體に於て經濟學說史を支配して居るとはいふものゝ、何れの學說も必ず何れかの一派に常に立籠つて居るといふが如き嚴重な意味で經濟學界を支配して居るものではない。例へば古典學派は其純粹なる形の下に於ては客觀主義の價値論と個人主義の出發點とを採用するものであるが、限界效用學派の影響を受けて現れたる所謂る折衷學派はマーシャルやディーツェルに見らるゝ如く價値論に於て主觀主義と妥協しつゝある。又限界效用學派は社會主義學說或は社會的觀察方法の主張の影響の下に、例へば、アモン、オイレンブルグに於て見らるゝ如く、社會的前提の重要性を認識しつゝあるのである。

此に述べんとする所のリーフマンは價値論に於て極端なる主觀主義、方法論に於て極端なる個人主義を主張するものである、筆者は曩に所謂る社會的觀察法を採用する學派としてディール、シュトルツマン、シュタムラーを擧げて其方法論を評した。（註三）、今此處に最も極端なる個人主義的基礎を主張するリーフマンを取來つて之を論ずることは、方法論の理解を深める點に於て決して無用ではあるまい。

註三　三田學會雜誌、第二六卷九號拙稿參照。

二　「經濟」の心理的解釋

リーフマンは自己の理論をば「徹底的に心理的—個人主義的基礎の上に立てられたる、統一的綜合的體系」（註一）と呼んで居る。其處で此「心理的—個人主義的基礎」とは何であるかが先づ問題となる。彼は最初に於て愼重に經驗的對象と認識對象とを區別する。科學の對象を概念的に決定する爲には、其前に、經驗に依つて一團の現象が知られて居らねばならぬ。此經驗的に知られたる對象を一定の論理的原則の下に統一的に認識して、其處に初て科學の認識對象が得られる。日常の經驗的對象を統一的に理解する此論理的原則、（リーフマンは、ミュンスターベルグの用語に從つて之を同一性の原則 "Identitätsprincip" と呼んで居る）こそは經濟學の對象をば特に他の科學の對象と區別して經濟學の對象として特徵付ける所のものであり、從つて又それは同時にリーフマンの所謂る心理的—個人主義的基礎を示す所のものでなければならぬ。

註一　p. p. O. Einleitung. S. 4

彼は心理的といふことを物質的・數量的といふ言葉に對立せしめ、從來の經濟理論が、何れも物質的に將た又數量的に經濟の意義を解釋したのに對して其心理的解釋を主張するのである。而して彼は個人主義的といふ意味をば、ディール、シュトルツマンに見るが如き社會的觀念に對立せしめ、之を私經濟的といふ言葉と同義に解釋して居る。即ち曰く「斯くして、其自體に於て心理的なる經濟の現象は、其法的規律とは全く無關係に社會的性質を帶びた現象に爲るのである。此法的規律たるや、社會的性質とは密接に關聯して居るには相違ないが併し、科學的認識の全く別箇の範疇に屬するものなのである。心理的現象が人間相互間の關係を呼び起すのであつて、其論理的統一的特徵は、或る外部的のもの、例へば對象物たる物質的財貨とか或は又法的規律の如きものに存するのではなく、吾々が特に經濟的と名付ける所の、考量の特殊性に在るのである」（同書五〇頁）。

其處で此「考量の特殊性」とは何であるかが問題に爲る。彼は先づ從來の多數の學者が、人間の欲望に對する財貨の存在量の稀少性に經濟の發生の根據を認めたことを指摘し、之を以て誤れる物質的數量的解釋なりとして居る。存在量を限られて居るのは此等の物質的財貨でなくて之を獲得する爲の人間の勞働力である。「若しも人間の勞働力が限定されて居らぬとすれば、外界の大多數の物品は無限に多量に供給せられるであらうし、之に依る吾々の欲望の滿足は益々完全に爲るであらう。吾人は勿論、此人間の勞働力をば數量的に解釋し、人間の「勞働力」の增加に依つて勞働力の限定が改善せられると考へてはならぬ、——此處に經濟の物質的—數量的解釋一切の不可能性の究竟の根源が存するのである、究竟の費用は勞働力又は勞働時間ではなく——外的財貨の供給に結び付いて居る所の不快感、努力であつて、それは少くとも一定點に達したる後は增大して行くものである。即ちそれは……結局外界の對象の有限なることに依存するのでなく、吾々の勞働能力の有限なること、增大する所の勞苦に……依存して居るのである」（同書七六—七七頁）。

斯樣な立場からリーフマンは經濟現象の物質性を棄てゝ經濟の本質は單に人間內心の心理的考量のみに在ると考

へるに至る。

「あらゆる經濟の最も根本的なる基礎に關する議論は、絶對的必然的に心理的なるもの、即ち快感と不快感との對立に歸着するに至る。……吾々が使用し得る勞働能力は限定されて居る、即ち此勞働能力と結合せる不快の感覺と努力とは漸次其强度を增し、結局需要、即ち獲得せらるべき效用を超越するに至る、斯くの如くして吾々は、目的物に依つて決定せらるゝことのない、全く別箇の經濟の解釋に到達する、經濟は、一定の目的物即ち存在量の限定せられたる財貨に對する行爲として解釋せられないで、之よりも更に深く人間の心理に、快感と不快感との對立に根差して居ることを認むるのである」（同書七七頁）「此考量に依つて決定され、獨特な方法に於て相互に結合されて居る所の行爲の全體を吾々は經濟行爲と呼ぶ、此行爲が何に關係するかは無頓着である。其目的は欲望滿足である、即ち、外界の對象物に依存するものを征服することに非ずして、享樂に在り、效用に在るのである。而して此目的は心理的なるものであつて、數量的―物質的に解すべきでは無いから、之を達する手段も亦決して、財貨の量でもなければ、技術的―數量的に解せる勞働や勞働時間でもなく、それは結局心理的概念である所の不快感であり、犧牲であり、努力であるのである。吾人は經濟的に之を費用と名づける。而して費用概念の此徹底的な心理的解釋にこそ、費用を以て一貨幣量と見る所の從來の理論と、吾々の理論との根本的な差違が在るのである。」（同書七八頁）。

其處で經濟を決定する所の心理的考慮、即ち快感と不快感の比較、換言すれば效用と費用との比較と其獨特な結合の仕方は何であるかといへば、吾人は、一般に所謂る經濟的原則、又は合理主義の原則の心理的解釋がそれに外ならぬではないかと反問することが出來ぬであらうか。が暫くリーフマンの言ふ所を聞いて見やう。

「經濟學の同一性の原則は物質財の供給に在るのではなく、考量の特殊の方法、即ち純粹に心理的に解釋して、可及的最大の效用過剩、即ち享樂を得る目的を以て、效用と費用とを對立せしめ且つ之を比較することに在る」（同書一二二頁）「經濟的原則は之を純粹に經濟的に解釋すれば……評價概念としての效用と費用との對立、快感と不快感との對立に存する。然かも此處に問題となるのは極大限の問題、技術上の極大限でなく經濟上の極大限の問題である、即ち可及的僅少の費用を以て可及的多大の效用、享樂を獲んとする欲望の滿足に就て論ずるのである」（同書二八一頁）と。

彼は效用と費用とを共に心理的概念とすることに依つて經濟的と技術的との區別をする。效用と費用とを物質的數量的に解釋することは結局兩者の比較をば技術的行爲たらしむるものであつて、リーフマンに據れば、從來の經濟學者の多數は斯る技術的解釋を以て經濟を定義し得ると考へて居つたのである。

費用と效用の比較は確に經濟の本質を爲すものであり、其心理的解釋は經濟を技術と區別する重要な制限であるが、此定義丈けでは特に「經濟的」の特質は示されぬ。リーフマンに據れば之を表示する爲には更に二つの制限が必要である。其一つは此效用と費用の比較が經濟的原則に從つて行はれるといふことである。即ち最少の手段を以て最大の效果を得るといふ原則に從つて行はれるといふのがそれである。

リーフマンは此制限丈けでは滿足せぬ、蓋し此原則に從つて心理的に快感と不快感とを比較するといふ丈けでは、特に經濟的なる現象のみが抽象せられるとは限られぬからである。即ち既にディーツェルやフィリッポヴィッチが巧に指摘せる如く（註二）經濟的原則は畢竟するに人間の理性の原則に過ぎぬのであつて、縱令ひ心理的に解せられても、それは確に特に經濟的な行爲を遙に超へた、範圍の廣い領域を包括するものであるからである。正にリーフマン自身が例示して居る如く「余の畫の休憩に際して、太陽が余の顏を照す時に、余は、恐らく、立上つて幕を下げ

るべきか、或は寧ろ太陽が其位置を代へ又は雲が太陽を遮るまで待つ可きか何うかといふことをよく考へ込むであらう。又夜間、起上つてガタ〳〵鳴る窓の扉を閉めやうか、或は寧ろやかましい不快感を我慢して、それが自ら止むのを待つべきか、或はそれに無頓着に再び眠るべきであるか何うかといふことに就いても決心に迷ふことが屢〻ある」（同書二八三頁）、のである。「斯くの如く快感と不快感とを對立せしめ、然もそれが前者の最大なるものを得、後者の最少なるものを得んとする努力を伴ふ場合は數限りない程ある。けれども、吾人は此場合に經濟であるとか經濟的行爲であるとかいふことを語ることは出來ぬ。」（同、二八三頁）

註二　三田學會雜誌、第二十六卷四號、拙稿參照。

それでは同じ經濟的原則に從ふ心理的比較でありながら經濟的現象でないものと、經濟的現象たるものとは何に依つて區別せらるゝか。リーフマンは此處に於て、多數の欲望間の比較と單一の欲望の比較との相違を持つて來る。彼の言を其儘引用すれば「一體何處に相違が存するのかに就て一層詳しく考察して見ると、吾人は、經濟が常に多數の欲望に關係して居ることに氣が附く。個々の孤立的な行爲に就ては、吾人はそれが經濟的であるか何うか言ふことは出來ぬ。全體の經濟計畫の範圍内に於て、他の行爲との比較に依り他の行爲との關係に於てのみ、それは常に「經濟的」として特徴附けられるのである。個々の孤立的な欲望を滿足させることは經濟的任務ではなく、行爲の目的は經濟的原則に依る總體的需要の滿足である。何等か一つの需要それ丈けではなく、爾餘一切の需要を顧慮すること、而して其顧慮の程度に從つて決定すること、それが經濟的任務なのである。故に一つ一つの選擇的行爲、一つ〳〵の處分は經濟ではない。若し余が料理店に座つて一定金額を一杯の葡萄酒に投じやうと決心した場合に、余が何れの種類のものを選ばうかを考慮してもそれは最早や經濟ではない。何故かといふに、爾餘一切の需要滿足に對する此需要の滿足の關係は最早や問題と爲らぬからである。若しも余が、一日休憩することは、余の平素の勞働を遂行することより、一層大なる效用を余に與へると判斷した場合に、余が、其一日の休憩時間をば或は散策に或は訪問に、若しくは或書物の飜讀等に其何れに之を用ふべきかを考慮するとしても、それは最早や經濟ではない。何故かといふに、此目的か將た或は他の從來の目的に其時間を使用すべきかに就ては既に決定して仕舞つて居るからである」（同書二八四頁）

リーフマンの此一節は吾人に當然次の如き疑問を生ぜしむるであらう。一體「總體的需要」とは何か、「經濟的計畫」とは何を意味するのであるか。唯〻「一つ丈けの需要でなく爾餘一切の欲望」とは何を指すのか。又此の「一切の欲望を顧慮し、其顧慮の程度に從つて決定する」といふことが經濟の計畫性を意味するとすればそれは畢竟多數の欲望を比較し合つて其最も强きものを取上げるといふことゝ如何に相違するのであるか。又經濟の計畫性といふ條件に依つて唯〻上記の例の如きものゝみを經濟から除外し得るに止まるであらうか。否な、上記の條件と此例との間に果して完全な論理的關係が見出されるであらうか。

此等の疑問を解く爲には先づ第一に總體的需要といふことの意味を知らねばならぬ。其處で總體的需要の滿足といふ意味をば彼は別の箇所で次の樣に說明して居る、「經濟の目的は心理的なるもの、即ち財貨の量といふ觀念に依つて置き代へらるゝことの出來ぬ所の需要滿足である。何故かといへば、それは總體的の需要滿足を主眼とするものであるからである。……此總體的需要に對する投費は、犧牲として不快感として感受せられ、それ〴〵の效果と比較せられるのである。而して此犧牲又は不快感を最も合目的的に分配することが經濟的任務である。經濟といふことを論ずるに當つては常に謂はゞ、比例的構造を造り出すこと又は極端に異なれる種々の欲望に對する投費を最

大限の原則に從つて最も合目的的に正當に分配することを主眼とするのである」（同書二八七頁）「吾人は、個々の行爲をば爾餘の行爲と比較することに依つて初て、換言すれば爾餘の行爲と關係せしめることに依つて初て、それが經濟的であるか否かを明言することが出來る。一つの同じ行爲はそれが經濟的であることもあれば又そうでないこともあり得る。全經濟計畫の範圍内に於てのみ、換言すれば之と結合せる諸種の考量即ち、あらゆる分配なり處分なりに依つてのみ、それが經濟的であるのか否かが示されるのである。」（同書二八七頁）「獲得せんとする效用に應じて相異せる種々の不確定の費用を其高度に應じて種々の需要の上に分配することが經濟的職分である」（同書二八九頁）目指す所の種々な效用、需要をば、最大限の原則に從つて、之が爲に投ぜらるゝ費用と比較すること、之が即ち經濟である。即ち行爲は經濟的原則の上に立つて他の行爲と比較せらるゝ場合に於てのみ經濟的として顧らるゝのである。……決して一つの行爲それ自體一つの財貨其物が經濟的なのではない。經濟に際しては、多數の需要、否な經濟を行ふ者が觀察するあらゆる需要を其費用と比較することを主眼とするのである」（同書、二八九―二九〇頁）「斯の如く、經濟は二重の比較である。最初に個々の需要が其費用と比較され、その次に種々の費用に對して、個々の費用投入に依つて獲得せらるゝ過剩分が比較されるのである」（二九〇頁）

由是觀之、所謂る總體的需要又は計畫的經濟なるものは畢竟するに、經濟的原則に制限を加へるものではなく、寧ろ經濟的原則そのものを一層詳細に說明するものに外ならぬことが看取せらるゝであらう、特に總體的とか計畫的とか言ふ意味は、吾人が或行爲を爲さんとする場合に、他に取り得べき多數の行爲と之を比較し、其效用の餘剩の大小に應じて其最も大なるものを取るといふことを意味するに過ぎぬ。總體的需要といふ意味を人間の一生に亘る需要とか又は考慮し得べき期間全體に亘る需要といふ意味に解釋しても、（註三）の經濟的原則は之を合理主義の原則と解すれば、之が爲に何等の制限をも蒙ることは無いであらう。蓋し各人は理性のある限り、其許す範圍の先見に從つて、最小手段の原則又は最大效用の原則を守らんとするからである。

註三　リーフマンは或箇所で總體的需要の意味を時間的に考慮し得る限りの期間に於ける全需要といふ意味に解して居る樣である。即ち曰く「既にゴッセンが言つて居る樣に、『人間は其全生涯の享樂の總額が最大と爲る樣に努力するものである』換言すれば、ゴッセンの『享樂論』の樣に、經濟計畫の意味を全生涯に亘らしむる程擴張せぬとしても、經濟計畫が許す限り、即ち吾々が現に知れる如く、種々なる效用と費用とが相互に對立せしめらるゝ限り、人間は費用と比較せる效用の總額、即ち收益の總額が最大と爲る樣に努力するものである」と。（同書、二九五―六頁）

然るにリーフマンに在つては、此合理主義の原則は心理的に解せられねばならぬ。人間の行爲に關する純然たる形式的の原則に對して一定の心理的內容が與へられて居るのである。否なリーフマンは之を心理的に限定したと考へて居るのである。果して然らば敢て問はん。此心理的內容は「經濟的計畫」に依つて如何に限定せらるゝのであるか、之に依つて何が除外され、何が確定せられるのであるか。

夜間、ガタ〳〵鳴る所の扉を閉める可きか、或は之を放置して安臥の快を貪る可きかは正に總體的需要滿足に關係が無いと言ひ得るであらうか。一日を休憩日に選んで或は散步に或は讀書に之を費すことは經濟的計畫に影響が無いと斷言し得るであらうか。彼は別の論據から此疑問に答へて居る。曰く「一層精確に觀察すれば、經濟行爲といふ言葉は、二次的、派生的な言葉である。結局、經濟的といふのは冀に述べた如く唯單に考量のみである。故に之は、經濟的行爲であると言つて吾々が指摘することの出來ぬ所の幾多の現象があるのである。例令ば美術的享樂、自然的享有、遊戲、敎訓、及び敎化、贈與、慈善等は、縱令ひ之に對して投費が爲され、不快感が同時に受取らるゝと

は言へ、其行爲自體は決して經濟的行爲ではない。併し經濟的考量が屢〻之に結びついて居ることは疑も無いことである。」と、（同書、二九九頁）。けれども此間の論理は決して明瞭ではない。如何なる理由で此結論が引出されるのか。リーフマンは更に續けて言ふ「若し或商人なり勞働者なりが散歩をしやうか或は其業務又は勞働に從事しやうかを考へ、之に依つて彼の總體的の需要滿足を配慮するとすれば、其場合には、其人が散歩の決心に到達すると否とを問はず、其人は經濟を行ふものである。けれども、若し其人が日曜日か、若しくは其働くまいと既に決心した其日に於て、更に散歩しやうか將た或は讀書しやうかを考量するとしても、其人は經濟を行つて居るのではない。其人は散歩をするといふことに依つて、當然經濟を行ふものではない。散歩は決して經濟的行爲ではない。唯〻其の最初場合の考量即ち其人を此行爲に導いた考量が經濟的であつたに過きぬ。何故かと言へば、其際には其人の目的たる總體的需要滿足が一つの役割を演じて居るからである。」云々。

けれども吾人は斯る議論から首肯し得べき結果を一つも引出すことが出來ぬ。一日を遊ばうと決心することは經濟的考量であるが遊ぶことは經濟的行爲ではないといふ論理は何處にあるのか。一度び決心してしまつた以上は最早や其決心に基づく行爲は總體的需要滿足に無關係だからだといふのであるか。それならば同じ論理で働かうと決心した以上其決心は經濟的考慮であるが働くことは最早や經濟的行爲ではないのか。散歩すべきか、將た或は讀書すべきか、若しくは働く可きかと考量する場合には、それ〴〵心理的に效用と費用とが比較され、而して其差額收益の最大なるものが選擇されるものであるとするならば、それは取りも直さず經濟的考量であり、之に從つて行動することは即ち經濟的行爲であるのではなからうか。兎に角此場合にも經濟的原則に從つて多數の欲望が心理的に比較されることは到底之を否定することは出來ぬ。然かも、若し勞働者が散歩をすれば經濟的行動を取るのでなく、勞働に從事すれば經濟的行爲を行ふことに爲るといふ其論理的根據は何處に存するのであるか。

現にリーフマンは經濟的行爲といふことを次の樣に定義して居るのである「經濟的といふ形容詞は即ち先づ第一に、經濟する人間が準備する所の考量、即ち處分（Disponieren）といふ言葉を以て最も簡單に特徴づけることの出來る所の考量に結び付いて居る。故に此形容詞には非常に異なつた種々の名詞が結び付けられる。例へば經濟的行爲とは斯樣な考量の上に立つて生ずる所の行爲であり、經濟的關係とは斯樣な考量に依つて導かるゝ所の關係であり、……。」（同書、二九一頁）「經濟的といふことは行爲若しくは其目的物の如き外的なるものに依つて決定せられるのでなく、心理的なるもの、即ち特定樣式の考量に依つて決定せられるのである。」（同書、二九七頁）「……余は欲望滿足を其目的とする所の經濟的考量が斯樣な目的に役立つ行爲に導かねばならぬといふことを常に到る所で强調した。」（同書、二九八頁）。

由是觀之、散歩と勞働と、慈善と營利と、寄附と勤勞と、其一を取つて非經濟的行爲とし、他を經濟的行爲と爲す理由は毫末も存しない。リーフマンの總體的需要滿足の定義を根據としては、此點に於て何等の區別も制限も齎らすことは出來ぬ。散策も讀書も睡眠も遊戯も、經濟的原則に依つて選擇せられる限り、總て皆經濟的行爲である。惟ふに此點に於ける彼の根本的誤謬は經濟的原則と總體的需要とを別々の條件の如く考へた點に存するのである。最少の犧牲を以て最大の效果を得んとする爲には多數の手段多數の目的が比較せられねばならぬ。彼が、經濟とは二重の比較であると言つて第一に一つの欲望を滿す爲に如何なる手段を取る可きかを定め、第二に欲望と費用との差の最大なるものを選擇すべきことを說いたのは此經濟的原則を二段に分けて表現したものに外ならぬのであつて、若し此二段の說明の中に、彼の所謂る總體的需要の意味が包含せらるゝとすれば、彼の此最後の制限は畢竟何もの

をも意味せぬことに爲るのである。さればこそリーフマンは經濟的考量と經濟的行爲との間に於て前述の如き甚だしき自家撞着に陷らざるを得なかつたのであらう。此矛盾は總體的需要滿足の意味を長期間に亘る全欲望の考慮といふ意味に解しても、勿論之を免かるゝことは出來ないが、斯樣に解する時は更に一層甚だしい誤謬に陷るであらう。即ちリーフマンに據れば、一年內に其財產を蕩盡するものは、最大效果の原則に從はぬものであるから、其人の行爲は經濟的行爲ではないが、一年內に病死すべきを豫想したり又は自殺を決心した者が其財產を消費するのは、正しく經濟的行爲と呼ばれるのである（同書、三〇六頁參照）。果して然らば短時日の中に其資產を失ふ危險に曝されて居る所の投機家は經濟するであるか何うか。若し其投機家が萬一を心配して一定資產を營業外に保存するとすれば其投機家の行爲は經濟的行爲となり、然らざる時は非經濟的行爲と爲るのであるか。金錢の貯蓄を生命と心得るが如き守錢奴は果して經濟的に行動するものであるか、斯る人物は其一生の總體的需要の最大の滿足を考慮して居ると斷言し得るのか。過度に將來を心配する節約家は、過度に現在を享樂する浪費者と同樣に經濟的行爲を行はざる者なのであるか。

之を要するにリーフマンの經濟の心理的解釋は前後矛盾、自家撞着を以て滿ちて居ると言はねばならぬ。斯る解釋は決して特に經濟的なるものを限定することの出來るものでもないと同時に、他の一方に於て通例當然經濟の中に入れらる可き或行爲をも往々之を除外するが如き結果に終つて居る。

リーフマンの根本的誤謬は、經濟的原則を心理的に解釋することに依つて、一つの方法論的原則、即ち、彼の所謂る同一性の原則が與へられると考へたことに在る。然かも之は全く誤りである。人間のあらゆる欲望滿足の行爲は、其終局に於て心理的である、一定の目的を達せんとする以上、手段として之が爲に支拂ふ所の犧牲は可及的少からしめんとするのは理の當然である。合理主義の現實的根據は經驗に依つて容易に立證することが出來る。內容が心理的であるといふことは決して此合理主義の原則に獨特の條件を與へることにはならぬ。心理的解釋といふことは、カレル・エングリスが適切に評言せる通り正に行爲者自身の主觀の問題に過ぎぬのである。此主觀的なる效用又は費用の內容に關して何等の限定をも加へぬ限り、此原則は依然として形式的論理的なる理性の原則に過ぎぬ。（註四）

註四　Karel Englis; Erkenntnisstheoretische Kritik der Grundgedanken Liefmanns. in Zeitschrift f. d. gesurmte Staatswissenschaften, 88. Bd. 1930 S. 11 ff.

主觀的に效用と費用とを比較するといふことが此原則の內容を少しも限定せぬ次第は上に述べた通りであるが、更に又心理的考量と言ひ、處分といふも、結局何等か對象に關してのみ之を言ふことが出來ることであつて、其考量なり處分なりの內容を決定するものは、該考量又は處分が依存する所の對象に之を求められねばならぬ。此事はアモンが其リーフマン批評に於て適切に言表はして居る。即ちリーフマンに據れば、從來の學者が物質的に經濟の意義を限定したるに對し同氏は物質的數量的見解を避けて心理的に之を解釋することに依つて全く別箇の經濟の解釋に到達したといふのであるが、アモンは之を評して曰く「此點（リーフマンの說く所の上記の對立を指す）には何等の對立も存在しない。吾人は經濟をば尙ほ能く一定の對象に對する行爲として解釋し、然も人間の心理に快感、不快感の對立に基礎を置くものとして之を觀ることが出來る。限界效用理論は實に之を行つて居るのである。若しリーフマンが『經濟とは特殊の考量であり、其對象物と全く無關係な處分である』（同書第一版六七頁）と考へて居るとすれば、之をその儘に吾々の念頭に思ひ浮べることは出來ぬ。何故かといへば、考量といふも將た又處分とい

ふも結局何等かの對象物に關してこそ存在するものであつて、此考量又は此處分が行はれる其樣式に對しては、此對象の種類如何は實に何等かの點に於て決定的でなければならぬからである。效用と費用との考量を抽象的に行ふといふ其事自體は、決して吾人が經濟學に於て敍述し說明せんと欲する所の生活上の現象や問題を發生せしむるものではない。如何なる場合でも、吾人は唯、何等かの對象物に關してのみ『處分する』ことが出來るのである。而して此對象物をば、世人は從來の見解に從つて財貨と呼ぶのである。而してリーフマンも亦經濟上の問題を取扱ふに當つて『財貨』に關して發言せぬ譯にはゆかぬのである。曰く『經濟を行ふものが獲んと努力する所の效用は、財貨に結びついて居る。……同じ事が費用にも當嵌る』斯くの如く『財貨』とは『外部世界の效用あるもの』を意味する云々（同書、第一版三七五頁以下參照）と。」（註五）

註五　Alfred Amonn; Liefmanns neue Wirtschaftstheorie I. In Archiv f. Sozialwissenschaft und Sozialpolitik. 46. Bd. 1918-1919. S. 420.

それから又彼の所說に據れば、彼が費用と呼んで居る所の「不快感」なるものは全く「勞苦」又は「努力」と同義語に解されて居るのであつて、勞働以外の原因から生ずる種々の不快感は其中から殆ど全く無視されて居るの觀がある。縱令ひ勞働を肉體的精神的兩方面に亘るものと解しても、人間が單に之のみから不快感を得るものでないことは、吾人自ら日常生活に於て常に經驗する所の自明の事實である。

然かもリーフマンは此「勞苦」及び「不快感」に就て次の樣な註釋を述べて居るのを見れば、彼が暗々裡に經濟現象を財貨に關するもの丈けに限定して居つたことは明である。曰く「……究竟の費用は勞働力又は勞働時間ではなく――それは外的財貨の供給に結び付いて居る所の不快感であり努力であつて、それは少くとも一定點に達した後は增大してゆくものである」（同書七六頁）「吾々が使用し得る勞働能力は限定されて居る、即ち此勞働能力と結合せる所の不快の感覺を努力は漸次强度を增して、遂には需要即ち獲得せらるべき效用を超過するに至るものである」（七七頁）と。彼は斯樣な言葉に依つて此等の不快感を生ぜしむる所の目的物たる財貨の觀念から離れ得ると考へたのであるが、併し斯樣な目的物即ち財貨から生ずる所の不快感の特質、即ち時間と共に增大するといふ其性質や需要と拮抗するに至つて中止されるといふ其性質は其儘採用されて居るのである、財貨獲得の勞苦から生ずる不快感は正に此通りの性質を持つて居るけれども、其以外の原因から生ずる道德上の不快感とか一身上の性格から生ずる不快感などは決して時間と共に增大すると限られたものではないであらうし、又需要と比較して其過剩部分の測定が出來るといふ樣な性質のものでも無いであらう。

然かもリーフマンが斯樣な不快感を無視して居るのは、畢竟彼が財貨獲得の勞苦のみを念頭に置いて居り、其他の勞苦は一切之を顧みなかつたことの一證左と看做すことが出來るであらう。

上來の所說に依つてリーフマンの方法論的原則の心理的根據が全く誤つて居る次第は明瞭であらう。論理の正しさは寧ろ「物質的數量的」と名付けてリーフマンが排斥せんとした古典學派又は限界效用學派に在るものと言はねばならぬ。論理上の嚴密が未だ餘り世人の注意を惹かなかつた頃には、ジェー・エス・ミルやディーツェルに依つて代表せらるゝ如き、經濟現象の物質的制限を以てしても、充分に經濟現象を定義することが出來たのである。經濟現象を所謂る經濟的財貨に關するものに限ることは實際問題としても、漠然たるリーフマンの心理的定義よりは遙に現實に一致して居るであらうし、又論理にも適つて居るであらう。

三　心理的解釋と價値論の排斥

アモンの說く如く、心理的考慮なり處分なりは確に或對象物を其基礎として認むるものである。限界效用學派の人々が經濟的財貨を其基礎に置き、之に依つて經濟の意義を決定せんとしたことは方法論的に正確とは言ひ得ないが（註一）併し何等の其礎なくして虛空に浮べるリーフマンの心理主義的解釋に比すれば優ること萬々である。

註一　三田學會雜誌、二十六卷四號、拙稿參照。

リーフマンの如き心理的なる效用や費用の概念のみを以てしては、經濟の意義を決定することの出來ぬのは勿論、價値價格の說明すらも亦不可能である。リーフマンは限界用效學派を非難して「經濟の技術的・物質的解釋」と「財貨の價値よりする出發點」との二點を重大なる誤謬として擧げて居る（同書、第三版二〇頁）。けれども、此二點共に詮じつめれば、經濟現象を物質的に限定したことに歸着するのである。リーフマンの言に據れば「交換經濟現象は主觀的價値でなく、個人的欲望感に溯る可きである」「經濟理論は……假定せられたる主觀的價値でなく、主觀的欲望に於ける心理に溯るべきである」（同書、三五頁）次第なのである。此主觀的價値と個人的欲望感と何處が相違し、前者の何處が誤つて居るのかと言へば、「價値概念が對象物に、即ち財貨に結びついて居る」（同書三五頁）に反し、後者が斯る對象から全く獨立して居る點が兩者の相違點であり、而して前者の斯くの如き技術的・物質的理論が誤謬なのである。

リーフマンは限界效用學派が假定する所の「財貨の稀少性」といふ前提を虛構なりとして排斥し、稀少なのは財貨ではなくして人間の勞働であると稱し、「勞苦」「努力」「不快感」といふ言葉をば純粹に心理的に解して、之を「財貨の稀少性」の代りに用ひて居る。而して不快感を意味する所の費用と、快感を意味する所の效用との比較に依つて價格が成立すると說くのである。換言すれば各人は經濟的原則に從つて此費用と效用とを比較し、其餘剩を最大ならしめんとする。而して此餘剩即ち收益を最大ならしむる樣に考慮する。其處で限界效用學說の說く所の限界效用均等の法則の代りに限界收益均等の法則が生れて來る。限界收益均等の法則は、交換經濟の社會に於ては直に價格を表示することに爲るのである、彼は一定額の貨幣は決して一定量の財貨を表はすものではなく、單に心理的の需要滿足の程度を示すものと解するのである。リーフマンは斯樣な解釋の下に價値概念を排斥せんと試みて居るのであるが、此點に關する詳細なる批評は既にアモンがリーフマン批評の論文中に於て適切に述べた所である。故に此處には更に之に倣つて再び詳論する必要はないであらう。（註六）。兎に角リーフマンの斯樣な試みが決して成功し得ぬことは、上記の所論に依つても明白に推測し得るであらう。リーフマンの心理的立場に於ける最も重大なる誤謬は效用や費用を或る心理的の大さと解し、之をば計算し得るものとして人間の經濟行爲を論じて居ることである。心理的快感、不快感なるものは或る强さを表すものであつて決して加減の出來る量的大さを表すものではない。限界效用學說に於て、限界效用均等の法則に從つて各人の享受する效用が最大限に爲るといふ場合に、吾々は效用其自體を計算して斯くの如く言ふのではない。人間の欲望と、之が滿足に役立つ財貨との間に一定の關係が認められる結果、此關係に應じて各人は經濟的原則に從つて行動するが故にこそ、此處に各人の消費する財貨の數量を通じて效用の最大といふことが認められるのである。人間の享くる效用と、效用を與へる財貨との間に一定の關係の存することが認られてこそ、限界效用學說は說明の上に於て效用の數學的計算をすることが出來るのである。所謂る主觀的價値は實に人間の主觀的なる欲望と、客觀的なる財貨の存在量との間に存する一定の關係から生れ出た觀念に外ならぬのであつて、價値の數學的計算が可能なのはそれが斯樣な客觀的存在根據を有して居ればこそである。然るに斯樣な價値の概念をさへ、それが或經濟財の一定量の表現であるといふ理由を以て排斥する所のリーフマン

に在つては、心理的な數量的大さを假定することなしに如何にして經濟現象の説明が出來るであらうか。彼が效用と費用の比較から初めて、「二重の比較」に依り、「限界收益均等の法則」に達する迄には、正にアモンの巧に指摘せるが如く、次の如き奇怪なる過程を經ねばならぬのである。リーフマンは、吾人が先づ獲得せんとする快感を其强さに應じて整列せしめ（經濟を行ふに當つては決して『獲得せらる可き快感』などに就て論ずるものではないが）而して之を不快感として想定し、（此事は出來得ることでもなければ、又必要なことでもない）その次に其不快感を取除く爲に引受くべき不快感を之と對立せしめ、（此除去の爲に常に不快感を引受けるとは限らぬのであるが）、此二つからして吾人の感覺の中に其差額又は關係を作り上げ、而して此差額過剩分、又は關係を相互に比較し、其大さに從つて決心を爲すといふことを假定せねばならぬ」（註七）のである。

註六　Vgl. Amonn; a. a. O.

註七　Amonn; a. a. O. S. 386.

快感から不快感を差引いたり其差額を比較してその最大なるものを求めたり、其差額の總和を最大ならしむることなどが、心理的に如何にして可能であり得やうか。況して其差額の大小の比較をば其大さ自體に求めるのでなく、費用單位に對する差額の割合の大小に求むるに至つては（同書、四〇六頁以下參照）リーフマンの學説は實に空想的な虚構の上立てるものといふの外はない。

四　「經濟」の個人主義的基礎

吾人は以上に於て、リーフマンの所謂る「心理的」立場を批判し、其誤謬を指摘したのであるが、更に最後に之と密接に關聯せる所の彼の個人主義的の主張と之に伴ふ社會的觀察法の否認とに就て一言する必要がある。

リーフマンは經濟的原則の心理的解釋をば經濟學の方法論的原則として居るが、之と同時に此原則よりして個人主義的觀察の必然性を説いて居る。今彼自身の言に由つて其論據を窺はう。

「經濟の本質は正に個人的目的たる欲望滿足の追求に在る。而して經濟理論の職分は、既に百餘年來常に表示されて居る如く、自己一身の欲望滿足に役立つ個人的行爲から交換經濟的現象を説明することに在る」（同書、四一頁）「……人は亦、此場合（交換經濟現象の説明）に於てもあらゆる科學に於けると同樣に因果關係を探求せねばならぬ從つて、從來の理論が謂はゞ無意識に自己の任務と考へて居つた如く、交換經濟現象をば各個人の經濟的行爲と考量とに溯つて之を討究するの必要に迫られる。あらゆる現象に動力を與へる所の此等の行爲や考量を顧慮せずしては交易の機構は何としても説明することは出來ない。社會的要素に基づく所のあらゆる制限があるにも拘らず、價格の形成は個人主義的に説明すべきであり、欲望に還元すべきである。」（同書、四四―四五頁）「……あらゆる方法論から離れて觀ても、全世界が經濟現象として、將た又經濟問題として認める所のものは、個人的經濟單位と其行爲並に考量の認識を基礎としてのみ能く説明し得るものである次第は、單純な人間の理性から觀ても明々白々なことである。何となれば、交易のあらゆる現象は縱令ひ價格形成の如く最も複雜なるものでも、將た或は經濟的職分を果す所の貨幣の如きものでも、結局個人的經濟單位の欲望に溯及して其本源を求め、此本源よりして之を説明せねばならぬ次第は、自明の理であるからである。」（同書、一二九頁）

交換經濟現象の説明は果してリーフマンの言ふ如く個人の欲望に溯及して之を求むることが自明の理なのであらうか。價格の形成は當然個人の欲望に還元して之を明にせねばならぬことであらうか。換言すれば個人の欲望に關するリーフマンの法則即ち心理的なる經濟的原則からして當然直接に交換經濟現象が説明し得らるゝのであらうか。

略言すれば經濟的原則は其自體に於て個人主義の原則なのであるか。それは何等の社會的要素を加ふることなく若しくは全く之を無視して個人主義的であり得るのであるか。吾々は此處に多少の疑なきを得ぬ。

前にも述べた通り經濟的原則は、縱令ひ、リーフマンの所說の如く心理的に解釋するとしても矢張り人間の理性の一法則たるに過ぎぬ。經濟學に於ける方法論的原則として之を觀ることは、取りも直さず、常に此原則に從つて行動するものとしての人間を觀察することに外ならぬ。此原則は各人に關する個人的な原則であるが、併し之に基づく行動が果して個人主義的社會を生むか否かは單に此原則のみからしては一言も推測し得ぬことである。此原則よりして交換經濟現象を說明する爲には、其社會が個人主義的に組織せられたる社會組織であることを前提とせねばならぬ。而してリーフマンの社會觀は恰も此前提を腦裡に假定して居るものの如くである。即ち彼はディール、シュタムラー、又はアモン等の所謂る社會的觀察法を取れる立場を非難して曰く、「今日の經濟秩序の觀察は如何にしても個人的經濟單位から抽象し去ることは出來ないといふ次第は自明の理である。何となれば今日の此經濟秩序は、社會的觀察法を取れる人々の勝手に想像せるが如く、上位に位する或意思に依つて動かされるとか、又は當該經濟秩序自體の意思を追求するとかいふものではないからである。」（同書五七頁）「……經濟理論に取つては「總體的經濟」とか個人が單なる奉仕的一員に過ぎぬ所の「大なる社會的全體」といふものはない。……唯個人的經濟單位と其間の關係とが存するのみである。此個人的經濟單位が貨幣交換の基礎の上に立つて如何に行動するかを、吾人は先づ第一に認識せぬばならぬ、が併し之に依つて同時に「社會的なる經濟過程」の基礎が認識せられたのである。交易の中に織り込まれた個人的經濟單位が如何に行動するか、これこそ即ち所謂る「社會的」經濟過程に外ならぬ。……」（同書五九頁）今日の經濟現象を觀察する所の經濟學に於て社會的目的とか、社會的全體といふものが論ぜらるべきものでなといいふことは、正にリーフマンの言ふ通りである。今日の社會が原則として個人主義的に基礎付けられて居るといふ點に於ても亦、吾人はリーフマンに贊成する。併し個人主義的社會組織の基礎を爲すものは決して經濟的原則ではない。前にも述べた如く經濟的原則は認識論的原則として、個人主義とは全く無關係である。個人主義的觀察を基礎付ける爲には、一定の社會的前提が必要である。社會組織が個人主義的であるとすれば、換言すれば社會組織が各人相互獨立して交換し合ふ所の個人的經濟單位より爲るものであるとするならば、斯樣な社會に於ける個人主義的經濟現象を觀察する爲には、一定の個人主義的なる社會的前提が必要である。此意味に於ける社會的前提は、シュトルツマンやディール等に依つて考へられて居る如き、或る「社會的全體」「社會的目的」を指すものではない。各個人間に存する一定の社會的交易關係を表すものとして解すべきである。

實際社會に就て之を觀れば、中央の統制が有力であつた所の中世の都市經濟に於ても、交換經濟的現象は確に存在したのである。けれども今日の社會と違つて、原則としての個人の行動の自由が著しく制限されて居つたが爲に、現今の樣な交換經濟現象を生んでは居らなかつたのである。

吾人は、今日の經濟秩序即ち個人主義的社會組織の特徵をば、原則としての個人の經濟的行爲の自由といふ點に認めんとするものである。經濟的原則に從つて行動する所の個人が、其經濟的自由を享受するを特徵とする所の一定の社會的組織を前提として之を觀察せらるゝ場合に、茲に初て論理的に統一ある經濟現象を了解することが出來るであらう。

リーフマンの如く、單に心理的に經濟原則を解することに依つて經濟の意義を限定し、交換經濟現象を之より導き出さんとするが如きは全く論理を知らざるものゝ仕業と謂はねばならぬ。

然らば此社會的前提の實質的內容は何であるとかいふことが問題であるが、今此處に直に自說を述ぶる餘裕のないことを遺憾とする。二三の學者の說に據つて之を見るに、ロードベルトスは之を分業に求め（註一）、ディーェツルは之を地方分權的組織又は所謂る自由競爭組織に求め、又最近アルフレッド。アモンは四つの社會的制限を擧げて、此方面に於て優れたる貢獻をなして居る。而してアモンの所謂る四つの社會的制限とは（一）（交換の前提としての）外的對象物、即ち交換當事者の一身外に存在する對象物に對する、或點に於ての獨占的な個人的處分權の承認、（二）社會的交易主體の個人的意思に全然依存して、即ち全く自由に（交換の目的として）此處分權を變更することの承認と同時に一度び行はれたる此處分の永續的拘束力の承認、（三）交換せらるゝ交易客體の數量關係を決定することの自由（即ち交換當事者の個人的意思に依存する可能性……、（四）（此社會的交換行爲又は交易行易の比較可能の條件としての）一般的社會的價値評準並に交換手段の承認（註二）即ち之である。

註二　Amonn; Objekt und Grundbegriff der theoretischen Nationalökonomie. 2. Aufl. 1927. S. 195.

アモンは此四つの社會的制限に依つて經濟學の對象を決定せんとして居る。故に、一般に彼は社會的觀察法の立場を守るもの認められ又所謂る經濟的原則の方法論的意義を全く否認するものゝ如く考へられて居る樣である。例へばリーフマンやディール（註三）の如きは斯樣に解することを明瞭に述べて居る。

註三　Liefman; a. a. O. S. 125. 參照。
Diehl; Theoretische Nationalokonomie. 7. Bd. S. 406. 參照。

併し吾人の所見を以てすれば、アモンの說を一概に斯くの如く斷言し去ることは出來ぬ、例へば「……一般的理性の原則としての行爲の「經濟性」といふ此一般的な個人的原則の前提は確に特に經濟學的なる認識に必要なる原則ではあるが經濟學的としてその獨自の特徵を條件づけるものではない」（同書、一八五頁）とアモンは言つて居る。

アモンの說くが如く、經濟的原則は確に理性的原則として、特に社會的なる交易關係を制限する所の原則ではないが、併し其逆に、此原則なくしては正に「特に經濟學なる認識」は不可能であるに相違ない。前述のアモンの定義の文句中に於ける「交換當事者の意思の自由」といふことが、此經濟的原則に從はざる行爲をも包含するものとすれば、如何なる結果を齎らすであらうか。嚴密に論理的なる經濟學上の法則を引出すことは到底不可能であらう。

由是觀之、經濟現象を認識論的に特徵付ける爲には、個人の行動に關する此所謂る經濟的の原則と更に此原則が一定の現象形態の取る所の特定の社會的組織に關する前提とが必要であるであらう。社會的制限に關するアモンの試みは此點に於て大に尊重さるべきものであると信ずる。唯單に社會的前提のみを以て經濟學の認識論上の問題を取扱ふ時は曾て、シュトルツマンやディール等に就て述べた如く、到底打ち勝ち難き難關に逢著するを免れぬであらう。經濟學が一定形式の社會內に於ける一定種類の人間の行動を論ずるものである以上、唯、單に此一定社會の「特に經濟的」なる特徵と制限を指摘する許りでなく、其社會內に於て行動する人間の行爲の中、特に經濟的なる一面が抽象せられねばならぬ次第は蓋し當然の道理と言つても差支えないであらう。アモンの言葉を藉りて言へば「社會的な交易に於ける個人的並に社會的制限の一定の關係」（同書一八五頁）を研めることが經濟學の根本問題である。アモンは問題を斯樣に述べて置きながら、直に自ら「經濟學上の問題の社會的制限は如何に、種極的に概念的に敍述せらるべきか」といふ問を發し、而して此問に答へることのみを以て滿足して居るやの觀がある。然れば經濟的原則に關するアモンの此曖昧なる態度は、カール・ディールをして次の如き評言を發せしめて居る。曰く「即ち吾人は人間の心理的動機から一定の經濟法則を抽出すべきか、將た或は社會組織の形式の上に退却すべきか唯二つ

のことのみが可能である。併し後者を選ぶ場合には、唯一の歴史的現象形態若しくは任意に構成せられたる組織を基礎に置くことは不可能である。アモンは精確理論又は純粋理論の體系と經驗的―現實主義的理論の體系との二體系の結合を企てたが、併し之に失敗したのである。」（前掲書、四〇七―四〇八頁）と。

ディールの立論其物の正否は此處に問題とせぬが、其結論は、蓋しディールの如き立場に立つ者よりすれば當然な適評といふべきであらう。

カアル・メンガアと價値心理學

小池基之

一

經濟理論は客觀的現實性に基かなければならない。此の點からして限界效用理論の無能力については充分に論じられてゐる。然し乍ら一面に於て限界效用理論の有する意義は、唯に價値決定要因としての勞働又は費用の概念に代ふるに效用の概念を以てしたのに止まるものではない。評價それ自體の本質の問題は彼等の價値論に於て初めて正當に認識されたとも云ひ得るのである。即ち從來價値に對する關心は主として價値の想像的な客觀的性質の上に、且つその客觀的と見ゆるものに對する基礎を發見せんとする試みの上に向けられて來た。明白な評價並びに價値の經驗的事實に從つて、複雜なる現象の集合體から價値を孤立せしめんとする努力がなされたのである。斯くの如く評價對象に向つての考察がそれ以前の價値理論の全内容を爲してゐたのに對し、墺太利學派に於ては評價對象の本質に關する問題は拋棄され、價値に對する思辨は價値對象と稱せられる比類なき客觀の形態の經驗的證據を發見することから免れる事を得た。この意味に於て墺太利學派の創始者カアル・メンガアによつて經濟價値論の問題は始めて正しく認得せられたと云ふ事が出來やう。（註一）

かくして經濟價値論は先第一に内在的對象としての「價値」を把握する事を以て初めなければならない。主觀主